

内務班・地獄の日々

福岡市城南区 太田 毅

私が徴兵検査を受けた昭和17年の夏はミッドウェー海戦で南雲艦隊が惨敗した直後だったが、国民は「勝った、勝った」の大本営発表にだまされて、まだ戦勝気分酔っていた時期であった。

両親は甲種合格を家門の誉れと祝福してくれた。私もうれしかったが、一抹の不安もあった。そのころ私は大牟田市の三井三池製作所に勤めていたが、仲間たちの話では兵営には過酷なリンチがあるという。

久留米市の西部第51部隊の入営日である昭和18年4月10日の前日に、祝入営の幟を立てた、家族、知人たちに見送られてわが家を発った私は、町内の神社に詣で見送りの人々にあいさつをした。

ガダルカナル島の転進（撤退のことを軍はこう称していた）などで戦局が苛烈になってきたので、当時は「行ってきます」はタブーで、「行きます」という生きて再び帰らずという悲壮な言葉を使っていたが、私は正直に「病気にならぬよう気をつけて必ず元気で帰ってきます」とあいさつした。

入営者のほとんどは千人針という弾除けの腹巻をしていたが、私は作ってもらわなかった。そんなおまじないに頼るより摂生（せっせい）することが大事だと、酒、タバコを飲まないことを決意し、従軍中かたくなにこれを守った。

大牟田市からの入営者は市が契約した兵営前の旅館に宿泊して、翌朝揃って営門をくぐった。第一中隊に配属され、赤地に黄色の1つ星の階級章のついた陸軍二等兵の軍服を支給され、祝いの赤飯を食べると兵隊になったぞという緊張で身がしまった。

初年兵は4つの内務班に分けられて兵営の生活をし、日々の訓練は観測、通信、砲手、馭者の各班に分けて行われた。

砲手班に入った私は改造38式野砲という、明治38年制式野砲の改造型で訓練を受けた。機械製造工場で仕上工をしていた私は、日露戦争当時の大砲で近代戦を戦うのかと驚いたが、戦地ではもっと旧式の火砲も使われていたのである。砲手全般の基本訓練の後、私は照準手の二番砲手に選ばれた。

砲手の訓練では、動作を間違えると兵長の助手が標桿という鋼鉄のパイプで頭や尻をなぐったが、私は標的になることはなかった。

訓練は厳しくても同年兵の集いは楽しかった。内務班の生活も睡眠中に南京虫に悩まされはしたが、わりと平穩だったので古年兵のリンチは昔話だったかと安心していった。

ところが、入営4週間ほどのある日、日夕点呼が終わってほっとしているとき、内務班に「初年兵集合」の号令がかかった。

いやな予感を抱きながら10人ほどが寝台の前に整列すると、馭者班の前任兵長が「今日、酒保に行った者はいるか」とにらみつけた。みな「はい、行きました」と答えた。すると、「齒を食いしばって両足を踏ん張れ」と言うなり、先頭の私から順に太い握りこぶしで力一杯なぐりつけた。

数回ぶんなぐられた私は、吹っ飛んでドッと倒れた。それほどすごいパンチ力だったから、口の中が切れて唇から血がにじんだ。

この洗礼が野砲隊名物の顔が変形する「変形ガッポ」とか、口の中がしみて味噌汁を吸えなくなる「味噌汁ガッポ」という、手荒な私的制裁だということであった。

最初なぐられた日は「畜生ッ！」という激しい憤りがこみあげ、寝台に入っても寝付かれないほどだった。軍隊では階級が上か先任の行為は絶対だった。明治天皇の軍人勅諭を例にひき「上官の命令は陛下の命令と思え」と、平気で下級者をなぐった。それに反抗することは軍への反抗とみなされたから、なすがままで、上級者の横暴がまかり通った。

なぐる理由は何でもよかった。ときには前任兵長が直接手を下さず、ニヤニヤ笑いながら、上等兵になり損ねた万年一等兵に指示してやらせることもあった。命じられた劣等兵は居丈高に叫び私たちをなぐりつけた。

初年兵たちのガッポへの反応は最初は驚きと憤りだったが、だんだん恐怖心が変わっていった。ガッポの翌朝はみな独楽ネズミの用に機敏に動作した。これはガッポの恐怖から逃れようという動物的な本能の現れにほかならなかった。

どの部隊でも私的制裁によって自殺する初年兵があったようだが、軍の威勢が強かったので新聞記事になることはなかった。家族にも病死と知らされていたという。

自殺者が出ると部隊は困るので「私的制裁厳禁」の通達が出ていたのだが、それは建前で週番士官も内務班長も知って知らぬ振りをしていた様子だった。その裏には「兵隊はなぐらないと強くならぬ」という本音があったので、リンチが横行したのである。

自らも初年兵経験者である司馬遼太郎氏はその著『ある運命について』で、「兵というのは、最初から兵である者はいない。まず恐怖を与え、規律を与え、間断なくその両方を与え続けることによって、なまの人間からなにごとかを抜きとってしまうことである。1週間もすれば、頭がぼうっとなり、俗世間にいたことが10年前であるような感じになる」と書いている。

私たちは毎晩なぐられる地獄の生活で、軍隊と上官に恐怖心を植えつけられ、兵としての鋳型にはめこまれたのである。

龍兵団の補充員として戦地に行くことが決まった8月下旬に、入営以来初めての外泊許可が出て、外泊者の氏名が張り出された。喜んで見に行くと自分の名が書いてない。

書き落としだろうと林教官に質すと「お前は初年兵教育要員だ。戦地には行かなくてよい」という。「それは困ります。ぜひ戦地にやってください」と懇願すると「お前は変わっているなァ。内地勤務を希望する者が多いのに」と首をひねったが、私が粘るので根負けして龍兵団要員に変更して外泊を許可した。

私が戦地行きを熱望したのは決して愛国心のせいではなかった。兵営に残って地獄の生活を続けることが嫌だったのである。戦地に赴けば運が悪いと戦死するかもしれないが、それでも内務班よりましだと思った。

8月末、門司港から輸送船安洋丸に乗ってビルマの戦場に向かった同年兵たちは、まるで修学旅行の中学生のようにはしゃいだ。それは気の休まる日とてなかった内務班の抑圧から解放された歓喜だった。

3年後、浦賀に復員した同年兵の数は、その時の1割にも満たなかった。私も終戦3週間前に左大腿部骨部貫通銃創の重傷を負ったが、幸運にも生還することができた。

昨今、いじめで自殺する中学生のニュースを聞くたびに、私は内務班のいじめをさけるために、戦場という死地行きを選択した日のことを鮮明に思い出す。